

日常実践に生きるN I Eのあり方

生徒達が新聞とのつき合い方を知り

新聞に親しむための指導はどうあったらよいか

長野県長野市立北部中学校教諭 中條昭雄

1. 実践の内容、研究テーマなど

本校のN I Eは指定2年目を迎えた。研究の内容については、昨年度の実践研究をふまえ、引き続き「日常の実践に生きる教育現場への新聞の活用法」に焦点を当てて研究を進めてきた。

私たちは、情報化社会の中に生きる生徒たちに、情報とのつき合い方を学んで欲しいと願っている。また、とかく身辺的、私的な面ばかりに目が向きがちで、視野狭窄に陥りがちな生徒たちに、社会的、公的な領域にまで関心を広げ、視野を広げて行って欲しいと願っている。そうした願いを実現するための教材として新聞は優れており、これまでも同僚の教師たちは新聞記事の学級通信への転載や道徳資料や社会科資料としての利用など、いろいろな形で活用してきているのだが、昨年度より2年間のN I E研究の指定を受け、新聞の学校教育への活用を少し自覚的に研究してきた。

私たちは、生徒たちが「中学を卒業したら新聞を読めるようになる」ようにと願って、これまでも社会科などで指導してきた。しか

し、現実の生徒たちの実態を見ると、中学3年生でも新聞とのつき合いは実に不十分なものであると言わざるを得ない。すなわち、テレビ番組はほとんどの生徒が毎日見ているし、スポーツ欄と4コマ漫画にも多くの生徒が目を向けており、社会面に目を通す生徒も多少はいるが、その他の紙面に目を向けているのはわずかな生徒にすぎない。従って、そもそも新聞にどのような情報が載っており、どのような紙面構成になっているかなど、新聞に関する基本的な事柄についてはほとんど知らないでいるのが、現在の中学生（本校生徒）の実態である。

こうした生徒の実態に鑑み、まず、「新聞にはどのような情報が載っているのか」「紙面の構成はどうなっているのか」などの基本的な知識を与え、「どこからでもいいから新聞を読んでみる」「1日1回は新聞を広げるという習慣が付くようになる」ということをねらいにして、実践・研究を進めてきた。

「新聞に載っている情報の吟味」とか「新聞各紙の記事の比較」というような面については、折りにふれて取り上げはしたものの、力

点はあくまで、生徒達が日常的に新聞に親しみ、教師が日常の指導に生かせる新聞の活用のかたの研究ということに置いている。2年限りの特別な実践でなく、今後の教育活動に継続して取り入れていけるような無理のない実践にしたいと考え、研究を行ってきた。

2. 新聞の置き場所と整理の方法

新聞は職員室に置き、必要なクラスや生徒が取りに来るようにした。その際、実践学級をローテーションするなど、届けられる新聞の数と必要数との調整を行った。また日曜日の分や残部を保存しておき、一学級全体に一斉指導する際に利用した。

新聞記事の学級掲示は、室内の掲示板と廊下の掲示板を利用して、なるべく多くの者の目にふれるような位置を考えさせ、掲示させた。

生徒会による新聞紙面の掲示は、全校生徒の目に触れるよう、生徒昇降口の廊下に机を置き、新聞の紙面を広げた上に透明のビニールシートを置くという形をとった。

＜学年集会のフリートーキングで

オリンピックの感動を語る生徒達＞



3. 対象学年と教科・領域

学年	教科・領域	実践の概略
1	社会	テーマに沿ったの記事集めと壁新聞づくり。
1	社会	「わたしの注目したこの記事」の掲示。
1	国語	テーマを決めた新聞作り。
2	学級活動	「私の選んだこの記事」の学級掲示。
2	学級・道徳	資料への利用、学級通信などへの活用。
3	選択社会	新聞を利用して現代の社会事象について考える。
全	社会	テストへの時事問題（新聞記事活用問題）導入。
全	国語	新聞切り抜きノート作り。
全	生徒会活動	全校対象に新聞記事（紙面）の紹介。
	教師向け	「NIE for TEACHERS」（情報）の発行。

4. 実践の内容（実践事例）

(1) 生徒会と2学年 特別活動での実践

概要：本年度は長野オリンピック・パラリンピックが開催され、地元長野市は大変な盛り上がりを見せた。オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて生徒会による新聞紙面の紹介を行い、オリンピックを一つのきっかけに、オリンピック関連記事を中心に新聞に親しむ指導を試みた。そして、「オリンピック・パラリンピックの感動」をテーマにフリートーキングを行った。

展開：

① 2学年による生徒会の引継に合わせて、12月から生徒会書記局の活動として、毎日、新聞2紙の紙面を生徒昇降口前の廊下に掲示する活動を始めた。担当生徒の選択にもよるが、多くの場合は第1面を掲示するようにした。

②長野オリンピック・パラリンピックが開催される頃になると、第一面の記事にオリンピック関連記事が増え、信濃毎日新聞は最終面もオリンピック関連記事の紙面になった。そうした紙面を掲示するようになり、オリンピック関連の記事が見られるようになると、立ち止まって新聞記事を読む生徒達の姿も増えてきた。パラリンピックの開催時にも同様にした。

③オリンピック、パラリンピックが終了した後、2学年では集会を持ち、「オリンピックの感動」「パラリンピックの感動」をテーマにフリートークを行った。実際に開閉祭式や競技を見学に行った感想や競技者に寄せた感想が多く出されたが、中には新聞などの情報をもとにいろいろと考えた感想も出され、新聞掲示の効果と思われる姿も見られた。

(2) 3 学年 選択社会での実践

概要：3 学年の選択教科社会科の「現代社会」講座では、新聞を用いながら現代の社会事象を取り上げ、社会認識を深めることをねらっている。今回は臓器移植法を取り上げ、討論を行った実践を取り上げた。

展開：

①<事前指導>家庭で新聞の切り抜きを行い、感想をまとめてくる。

②<本時の流れ>

・記事を読み合わせ、記事の内容をつかむ。

T：感想を発表して。

S：亡くなった人の心臓や腎臓などによって他の人が助かるのは良いと思う。

S：臓器移植しか助かる方法のない人にとっては、うれしい法律だと思う。

S：臓器を提供してもらえる人にとってはいいかもしれないけど、提供する立場の事も考えると、なんか変な感じ。抵抗を感じる。

T：臓器がまだ機能している”脳死”の状態

で、臓器を移植しなければならないんだね。
S：脳死を人の死としていいのか迷う。脳の機能が停止しても、まだ心臓は動いているのだから。

S：どうもすっきりしない。心臓が動いて、体にぬくもりがあるなら、死んでいるとは言えないような気がする。

S：私は自分の家族が脳死になったとしたら、提供に賛成はできない。

T：脳死の判定が問題になっています。複数の医師が脳死を判定し、移植にあたっては、本人の意思か家族の同意が必要と条件を付けています。そして、臓器移植を待つ人たちにとってはようやく道が開かれると書いてあります。

S：医師の判断が重要になると思う。医者

は患者を助けたいから、脳死の人も移植を待つ人も両方助けたいと迷う。
S：以前、日本で心臓移植をした医師が殺人罪で訴えられたことがあると書いてあった。医師も判断が難しいし、慎重になると思う。

(3) 3 学年 道徳での実践

概要：少し以前のものではあるが、ある新聞に資料1のような記事が掲載された。学校におけるルールの受け止めについて、生徒の側と教師の側とではだいたいずれが生まれてきていることが、いくつかの新聞記事で指摘されている。学校におけるルールや教師の指導には禁止事項が多い。これには理由があるのだが、それらが彼らの中で納得のいく受け止めがなされていないとしたら、効果のない指導を繰り返すことになるだろう。

そこで、生徒と親の双方にアンケートをとり、親の考え方を聞きながら、自分の生き方の基準を考え直すきっかけを作りたいと考え、「親子で考える中学生の道徳」と題して、参観日に授業を行った。

展開：

①＜事前指導＞

生徒と親の双方に「中学生として これはいけない いや悪くない」というタイトルでアンケート（アンケート項目は新聞記事をもとに作成）を実施した。その際、そう考える理由もできるだけ書かせた。回収したアンケートを集計してグラフ化し、生徒と親の意識の違いを分析した。グラフはTPにして、OHPで示せるようにした。

②＜授業の概略＞

T：今日は先日答えてもらったアンケートに基づいて、人間の行為・行動の基準について考えよう。

T：親子で意識が共通の項目と、だいぶ受け止め違う項目があった。共通していけないことだと思っているのはこれらです（万引き、自転車や傘を黙って使う、学校でたばこを吸うなど）。これらがいけないと言う理由は？

S：人に迷惑がかかる。

S：理由なんて要らない。人として当然。

S：自分がされて、いやな思いをした。

T：みんなの意識が健全で安心しました。人間には、人に迷惑をかけるようなことはしてはいけないという大事な行動の基準があるんだね（第一の基準，“人に迷惑をかけない，人間として当たり前”を押さえる）。

T：親はいけないと考えるが、生徒は良いと考える傾向が強かった項目はこれらです（ピアスを付ける、漫画を学校に持ってくる、友達にものを貸してお金を取る、教科書を学校に置いていく）。良いと思う人は理由を出して。

S：人に迷惑をかけるわけではない。

S：個人の自由だ。

T：良くないと考える人は？

S：学校は勉強するところだから漫画やピアスは必要ない。

P：友達にものを貸してお金を取るなど、中学生としてやるべき事ではない。

T：人に迷惑をかけなければいいという考えもありますが、「中学生として」とか「学校では」というように、立場や場面に応じた考えが必要だという意見がたくさん出されまし

た。「中学生らしく」という言い方に反発を感じたり、それはどういうことなのかと思っている人もいますが、同じ事をあなた方も周りに要求していますね。教師のくせに、親なのに、大人なのに、一年生のくせに、などというように。それぞれの立場や場面を考えた振る舞いはどうあればいいのかということは考える必要があります（行動の第二基準，“立場や場面を考える”を押さえる）。

T：靴の踵をつぶして履くなんていうのも、親子でかなり意見が分かれています。良くないと考える人、理由を挙げて下さい。

P：靴が傷む。

S：だらしがないというか、みっともないと思う。

T：こういう感じ方、考え方は人間にとっても大事だと思います。だらしがない行動やみっともない行為を慎むと言うこと。より良いものは何か、より望ましいのはどういうことかを考えているのですね。今回のアンケートの中にはこうした項目は挙げられていませんが、よりよいものを目指すという価値基準をどれだけ持てるかがあなた達にとって大事です。家でお父さんやお母さんに、みっともないとか、だらしがないとか、良くいわれると言う人、手を挙げて。ありがたいことだね。そういわれたことの大事さが、やがて分かるだろうと思います（行動の第三基準，“より望ましいあり方を考える”を押さえる）。

T：今日は人間の行為の基準について考えてきました。自分の基準をもう一度見直してみよう。自分の生き方が良く現れているはずです。また、自分のお父さんやお母さんに言われる小言のありがたさが分かる時がやがて来ます。うるさいと思っても、半分の耳で聞いておきましょう。

(4)教師向け新聞切り抜き情報の発行

概要：職員も多忙な生活を送っており、新聞に目を通す余裕を持ち得ないような状況がある。そこで「NIE for TEACHERS」という新聞切り抜き情報を発行し、教育に関わり先生方に知ってもらいたい情報、生徒を取り巻く状況の把握に役立つ情報の提供を行った。

情報を読んだ職員が職員室で話題にしてくれる事もあり、自己満足の活動ではあるがそれなりに意義があったと思っている。(資料2参照)

以下は昨年度来の実践

(5) 1 学年 社会科での実践

概要；自分のテーマを決め、テーマに関連した新聞記事を収集していき、それらを利用した壁新聞を作り、発表する。自分の関心のあるテーマについての情報を集めたり、情報の再構成をして見るなどの情報活用能力を高めたり、そのことを通して新聞に親しむことをねらいとしている。

展開；

- ①新聞を持ち込み、新聞を読む。新聞の紙面構成などについて説明する。興味を持った記事を切り抜き、感想を書き、紹介し合う。
- ②自分が興味を持って追究したいテーマを決める。
- ③テーマに関連した新聞記事を収集する。
- ④収集した新聞記事を利用して、テーマについて壁新聞にまとめ、発表する。

生徒たちの追究したテーマ；「いじめをなくせるか」「環境問題を考える」など

(6) 全学年 社会科での実践

概要；毎日のニュースに目を向けさせ、社会的な関心を高めることをねらいとして、次のような活動を行う。①1日の新聞から二つの新聞記事を選び、それをラインマーカーで囲み、「この記事に注目」というプリントを貼付し、掲示板に掲示する。②定期テストに新聞記事を利用した問題を導入する。

展開；

- ①新聞を持ち込み、新聞を読む。新聞の紙面構成などについて説明する。興味を持った記事を切り抜き、感想を書き、紹介し合う。
- ②当番の周り順を決め、一週間交代で担当者が毎日新聞を読み、注目した記事を掲示する。
- ③紹介されている新聞記事について教科担任ができるだけ授業で取り上げるようにする。
- ④定期テストには必ず一つは新聞記事を利用した問題を取り入れる。

(7) 1 学年 学級活動での実践

概要；新聞の投書欄を読み、一つを選び感想を書き、発表する。また、新聞への投書原稿を自分で書き、実際に投書する。こうした活動を通じて、新聞に親しむとともに、自分の意見を形成し、それを表現する力を付けることをねらう。

展開；

- ①新聞を持ち込み、新聞を読む。新聞の紙面構成などについて説明する。興味を持った記事を切り抜き、感想を書き、紹介し合う。
- ②新聞の切り抜きを投書欄に貼り、投書の内容に対して感想を書き、発表する。
- ③投書原稿を自分で書き、実際に投書する。
- ④友達の投書の採用を喜ぶ。

4. 実践の感想と今後の課題

教育への新聞の活用については以前から興味を感じており、実践・研究の機会を与えていただいたことは、ありがたいことであった。今後も教育実践の中に新聞を利用した学習場面をつくっていくための大きなステップとすることができた。

生きた情報源である新聞は、生徒達にとって、学習の貴重な資料となりうる。それは、一つには、タイムリーな情報提供ができ、生徒達にとっては興味深い情報に接することができるということ、二つには、情報が多様な内容を含んでおり、どの生徒もその多様な情報のどこかに接点を持てるためである。そのためか、おおむねどの生徒も取り組みは割合意欲的であり、切り抜きの活動なども積極的に行っていた。また、学習を続けるうちに、新聞と接することが特別なことではなくなり、自然に接することができるようになってきた。

ただし、新聞を利用した学習の場面をつくらうとすると、通常の授業のカリキュラムに加えて指導の時間が必要となることも多いため、その時間をどう生み出すかが問題になる。

また、効率的な指導を行うためには、基礎的な事柄については、ある程度、指導の内容や方法のマニュアル化が必要かとも思われる。それを発展させていくのはアイデア次第であり、教科の枠を越え、無限の可能性があると思われる。

靴のかかとをつぶして履く。それは悪いことなのかどうか——教師が「もちろん良くない」と考える行動を、生徒の多くは悪いと思っていない。そんな感覚のズレを示す意識調査を、東京都

東京の中学

意識調査

中央区立中学校の生徒指導主任の先生たちがまとめた。教師の目には一般的に「悪い」行為と映る十五項目について生徒の考えを聞いたところ、九項目は三割以上の生徒が「悪くない」と答えた。

質問した十五項目は、ベテランである生徒指導主任から見れば、いずれも「中学生としてほめられる行為ではない」。

ところが、「教科書を学校に置いていく」(七〇%)、「かばんにシールやアクセサリをつける」(六五%)、「靴のかかとをつぶす」(五五%)の三項目は「悪くない」

教科書は学校に／かばんにシール／靴のかかとをつぶす

生徒の半分以上「OK」

という生徒が多数を占めた。

「他人の自転車に乗って乗る」「万引き」などはさすがに大半が悪いとしており、学年による差も小さかった。一方、「学校に携帯電話を持って来る」のは「悪くない」と答えた子が二年生では二六%なのに、三年生は四一%。「用もないのに保健室にいる」も、一年生の二八%から三年生四二%と急増している。全般的に「なぜ悪いのか」の説明

を生徒が納得しきれないものほど、学年が進むにつれて反発が広がる傾向が見えた。「保健室」については、教員仲間である養護教諭からも異議が出たという。

「ごく普通の中学生が何かんだ。大きな問題を起こすわけではない。でも、注意してもきかない。今までの指導が通じなくなってきた」

二、三年前から強く感じられるようになったこんな困惑を、中央区の全区立中(四校)の生徒指導主任が話し合ふなかで、生徒たちの意識を探ってみることにした。

生徒と認識が違うのではないかと思われる十五項目を考え、昨年十一月に、「中学生がすることとして、悪いことかと思えますか」と、各校でアンケートした。生徒の約七割にあたる千五百八人が回答した。

全体世話を務めた銀座中学の鈴木一郎教諭(四校)は、「生徒たちの普段の姿からおおよその予測はついて

もっと子供を信頼して

深谷昌志・静岡大教授の話 先生と子どもの規範感の差は、近年一層開いてきた。学校の変化の速度が遅すぎるんじゃないか。校内

でしか通用しない規範を押しつけても、賢い子は形だけ従い、校門を出れば違うことをする。二面性のある子を作るようになる。アメ

中学生として悪くないこと



ていたが、数字が出て、ここまで来たかと改めて思った。頭から悪いと言っても、もっと通用しない。なぜ

悪いのか、一つひとつ説明していかなければならぬ。生徒指導のソフトを見直す必要がある」とい

う。今年度は教師がこの結果をどう受けとめていくか、継続調査する予定だ。

リカの学校は、人に迷惑をかける行為には厳しい。が、ピアスの是非を議論はするが、最終的には本人の問題とみる。日本の中学は「前非行」とされるクレーンが広い。もっと子どもたちを信頼して大丈夫

だ。行動の規制をゆるめて、半面、人に迷惑をかける、危険を及ぼす、社会的に許されないなど、いけないことをほめるべきであることができれば、学校再生の芽になると思う。